

論文名：エナメル基質タンパク及びウシ異種骨基質を用いたコンビネーション歯周組織再生療法におけるコラーゲン遮蔽膜の臨床的・3次元エックス線学的評価（要約）

新潟大学大学院医歯学総合研究科

氏名 根本 康子

（以下要約を記入する）

【目的】

これまで、歯周組織再生治療において、成長因子でもあるエナメル基質タンパク（EMD）と足場となる脱タンパクウシ骨基質(DBBM)の併用による有効性が報告されてきている。一方、DBBMには吸収性コラーゲン膜(CM)の併用が多く用いられているが、EMDに加えてCMの併用効果に関する研究はほとんど無い。本研究では、CMの併用効果を検討すべく、慢性歯周炎により生じた歯周骨内欠損および分岐部骨欠損病変に対し、EMDとDBBMによるコンビネーション歯周組織再生治療において、CM併用の歯周組織再生に対する有効性について臨床的及び3次元エックス線学的に比較検討した。

【材料および方法】

インフォームドコンセントの得られた慢性歯周炎患者40名を無作為に2群（実験群、対照群）に割り当て、通常の歯周基本治療後に残存した、骨内欠損を有する歯周ポケット深さ(PPD)6mm以上の部位を選定し、実験群はEMDとDBBMとCMを併用し(+CM群)、対照群はEMDとDBBMで(-CM群)、歯周組織再生療法を行った。治療前、12ヶ月の時点で、PPD、付着の喪失(CAL)、エックス線の骨欠損深さ、プロービング時出血、動揺度を測定した。また歯科用コーンビームCT(CBCT)により12か月後の新生した骨様硬組織の体積(FBV)およびそれがベースライン時の骨欠損量に占める割合(BFR)を測定した。これらの指標により2群間の統計学的有意差を検定した。また、骨欠損形態、バイオタイプ（歯肉の厚さ）、喫煙の有無で層化比較を行い、2群間の統計学的有意差を検定し、比較検討した。

【結果】

群内比較においては、両群とも12ヶ月後ではPPD、CAL、は有意に改善した($p<0.05$)。動揺は両群とも有意差は無かった。群間の比較においては、平均PPDの変化量で+CM群が有意に減少し、平均CAL、FBV、BFRでは、両群に有意差はなかった。層化比較では、+CM群が、歯肉の厚い患者においてPPDとCALが、喫煙者においてPPDが、有意に改善を認め($p<0.05$)、それ以外では両群のPPD、CAL、FBV、BFRに有意差はなかった。

【結論】

EMDとDBBMによるコンビネーション歯周組織再生治療において、CM併用の歯周組織再生に対する有効性はEMD+DBBM、EDM+DBBM+CMとも付着の獲得においては同等に有効であるが、CM併用で歯周ポケットの減少においてより有効であることが示唆された。